

第八節 商業

一、和泊町商業会の移り変わり

昭和三十五年十月に商工会法が制定され、同三十六年三月三日に和泊町商工会が認定された。

昭和三年ごろ、これといった遊びのなかった時代、和泊尋常高等小学校の玉江校長先生の提案で、小学校の職員と商店街の店主店員が和泊小学校校庭（現役場庁庭）において、対抗野球大会を催したのに端を発し、市来政興氏らが発起人となって毎年一回十五夜に催しを行った。

和泊本通りにおいて綱引き大会を催し盛況だったことを記憶している。そして遊びだけでなく夜は親睦会を開き、商店街発展のためにいろいろ話し合いを持たれるようになった。

昭和八、九年ごろから日支事変が激しさを増すにつれ物資が不足し、個人で仕入れるよりも団体で仕入れる方が有利であり、米・大豆・バラカスなどの共同仕入れが行われるようになった。これが共進組合の発足である。

市来政興氏を中心になって、住民の日常生活に不自由させない努力が続けられた。現在の徳田酒造ビルの一部と町田石油の敷地にあった尾辻藤助氏の「ユンヌミシ」の倉庫を借りて事務所を置き営業を始めた。

当時の組合員は尾辻藤助氏・前田喜恕氏・肥後徳仁氏・弘野中吉氏・佐久川氏・古波倉正弘氏・秋葉泉川氏・大坪政熊氏・喜美留の喜利徳氏で、当時の和泊商店街の見取り図は別記のとおりであった。

終戦後間もなく尾辻氏が亡くなり、事務所を市来氏の店（現在大坪やえ商店敷地）に移し、米などの穀物類を扱った。当時は専売品ではなく、誰でも扱うことができた。運営費は共同仕入れの手数料でまかなった。

昭和十年ごろ和泊村商業組合ができ、事務所を前田喜恕商店（現在の鹿児島銀行敷地）に置いた。その後まずまず戦時色が強くなり、政府の指導で昭和十六年ごろ生活必需品統制組合が発足した。共進会・商業組合・生活

必需品統制組合と名称は変わったが、通会的な活動は変わらず、取り扱い商品が多くなったために事務所を秋葉商店の倉庫（現在の補助商店敷地）へ移した。当時はすでに切符制時代に入り、衣料品を始め日用品等に不自由を来していた。

大島郡の連合会長は久井喜美悦氏で笠井純一氏は県の郡出張所長であった。戦争の激化に伴い食糧事情が悪くなり、米は許可制となって食糧営団が生まれ郡の初代所長に笠井純一氏が就任した。和泊では肥後商店、手々知名では大坪商店が取り扱うようになった。食糧営団は戦後自然消滅した。

昭和二十三年ごろこれまで組合を指導して来た市来政興氏がもともとなって、通り会を復活させ春秋二回慰安会を開き、高千穂神社まで仮装行列をしたり高千穂神社や金比羅神社で相撲大会を行った。通り会の活動は二十四年から三十五年ごろまで続いた。

昭和三十五年六月商工会の法制化に伴い、笠井氏から商工会を早く発足させたら指導員の派遣や県からの助成金もあり、他町村に先がけて設立した方がよいとのアドバイスがあった。それで前田精造氏・大坪政照氏を中心

となつて定款を作成し設立準備にとりかかった。

三十六年二月、山田三十茂・大坪盛仁両氏が県庁に申請に行き、三十六年三月三日認可され四月一日設立総会が開かれた。そして山田三十茂氏が初代会長で大坪政昭・前田精造両氏が副会長になった。その後会員一致協力、和の精神で各々の分野に励み、県下でも優秀な商工会に成長発展した。

二 商工会と農協の関係について

農協発展のために永い間貢献した平新利農協長が引退して、現在速水朝重氏が農協長に選出されている。当初は産業組合と称し伊集院周国氏が組合長であった。大島郡は明治に入って苛酷な薩摩藩の黒糖支配から自由になったのもつかの間、今度は本土の商人たちの支配を受け苦しめられた。

明治三十七年九月島司（現在の支庁長）福山宏氏が、黒糖の取り引き方法を改善するため、黒糖の協同販売を計画した。島司を引き継いだ富田長則氏は明治二十八年一村一組の産業組合を作ること強力に指導した。当時

ネ氏を始めとし優秀な婦人がたくさんいた。周国氏は偉大な指導者で、販売や購買に対し常に商工会と競争していた。場所はやはり現在地であった。

商工会は市来政興氏のもとに大坪政熊氏・前田喜恕氏・尾辻藤助氏・市来武夫氏・市来政伸氏・市来徹生氏・福元二郎氏・中村宏氏・弘野中吉氏・古波倉正弘氏・佐久川氏・田崎三良氏等かおり、ゆり関係では前久茂氏・大里宮元氏・川畑業忠氏・陽兼生氏・福山清定氏・伊地知季蔵氏・永吉池治氏・東忠人氏・名島中治氏らが業者になっていた。

当時は現金に困り品物を買う際、農協では現金、商店では砂糖・ゆり代金でと当座売りがなされた。昭和六年ごろの物価は米一キロ十一銭・ソーメン百匁四銭であった。黒砂糖が一銭で六個買えた。また当座買いには現金買より五厘上げて利息分に見合わせたが実行はむずかしかった。

農協は特に購買事業に力を入れ次第に大きくなり、鉄筋コンクリート建で一階は倉庫、二階は会議室ならびに催し場となり、婦人部貯畜会を作るなどますます発展した。

の島の人たちは借金が多く組合に加入する人は少なかつたが、役場に勤めていた周国氏は農家の利益のためにどうしても組合を作らなければならないと各農家をまわり、組合設立の必要を説いて歩いた。彼の情熱が実を結び明治四十年七月、産業組合が設立された。

組合を通して農家の生活もだんだん良くなり加入者もふえてきた。周国氏の努力が認められ明治四十年に二十五歳の若さで主任書記となり、支部長（今の農協長）を兼務することとなった。そのころ砂糖の積み出しには荷車・馬車・ヒカシヤマを使ったが、道路は悪い上にせまく、砂糖小屋（サタヤ）から和泊の店まで運ぶのは一日仕事で大変な苦勞であった。そのため砂糖積み出しの労力と暇を少しでも軽くするために、道路を整えることと港をふやすことを考え、製糖期には和泊港だけでなく伊延港・与和港・内喜名港にそれぞれ砂糖倉庫を造り、四つの港に寄港させるように努力した。今でも与和の浜・内喜名の浜に黒糖を集荷した倉庫の跡が残っている。

周国氏は、困っているときこそ貯金が大事だと貯蓄の奨励をした。また全国で始めて婦人部をつくり婦人消防団を結成して防災意識を高めた。婦人部長には伊集院カ

伊集院氏は昭和二十一年八月二十九日に組合長を辞めるまでの三十九年間、農協のために頑張った人である。次に永吉実定氏が組合長になり、その後島義智氏に変わった。そのころの農協は貯金もなく本当に大変な時代であり、山田三十茂氏の応援を得て苦難を乗り切った。

町が良くなるためには役場・農協・商工会が協力しお互いに切磋琢磨しなければならぬと思った。

知名のAコープに次いで六十年五月三日に和泊Aコープがオープン、新装の店舗で商品もそろい町民が喜んでる。

三 鹿児島出身の商人

薩摩藩の支配下時代は砂糖取り引きのために御用商人が来島し、砂糖と日常生活用品との交換をしていた。記憶は定かではないが大正末期から島で活躍した鹿児島商人を紹介してみたい。

(1) 尾辻藤助氏 叔父の山田伊八氏が鹿児島で商売をしており、その支店長として沖永良部に来た。当時一番大きかった店で「ユンヌミシ」といい腕をふるっていた。

現在の町田石油と徳田酒造ビルの敷地の一部に店があった。藤助氏の父は鹿児島の人で母は大里宮吉氏のおばあさんにあたる人である。砂糖と雑貨を扱い、人望家で私設の消防団を作り初代消防団長となって尽くした。その店の番頭が大坪政熊氏・嶺本郁三氏（古里）、まだほかにもいたと思う。世界大戦が始まり砂糖相場の変動が激しく失敗して引きあげた。

(2) 川村大吉氏 多喜屋の屋号で現在の前田呉服店の屋敷で店を経営していた。ユンヌミシと一、二位を争う多額納税者であった。そこに勤めていた店員として藤武安秀氏・市来武夫氏・池田内義氏らがいる。藤武氏の話によれば当時見習いで五円、二十歳代で十円だったそうである。物価は石油一合四銭・油一合四銭・酒一合（沖縄泡盛）十五銭・大豆一升二十銭・米一升二十五銭・粟一升二十銭・塩一升四銭五銭・ナフトル生地の反物一尺七銭であった。川村商店も砂糖の値くずれで損をして引き揚げた。

(3) 迫十次郎氏 屋号は十次郎店、その親せきである前田喜恕氏が番頭をしていた。十次郎氏の長男は現在七十歳ぐらいであるが、鹿児島で扇屋という大きな商売をし

ている。

(4) 菊屋宗次郎氏 砂糖や反物を手広く扱い、現在の秋葉ミヨ先生の屋敷にミーシャという屋号で経営していた。島出身の番頭は秋葉泉川氏・市来武雄氏・川畑業忠氏がつとめ、菊屋氏が引き揚げた後に秋葉泉川氏が屋号を引きついで店を開いた。

(5) 山口喜仁仁門氏 先に列挙した人たちと同じように店を持っていた。

(6) 丸野金之進 屋号はキヌシヤで現在の福元金物店の敷地で雑貨商を経営していた。昭和十三年三月郷里の川辺郡笠沙町に引き揚げた。

四 沖縄出身の商人

鹿児島商人が引き揚げた後、マーラン船で行き来していた沖縄の人がそのまま住みついて島で店を開いた。

(1) 田崎三良氏 昭和六、七年ごろ開店。沖縄の焼酎・砂糖樽用のクリ木・ホーライ米（トウグミとか台湾米）

を扱い、敷地は現在の東書店の所であった。

(2) 佐久川商店 田崎三良氏と同じ商売。

(3) 古波倉商店 大きな店で沖縄航路の切符を取り扱っていた。当時は木造の十四、五トンの船であった。沖縄泡盛やキザミタバコの販売をしたり精米所もしていた。

古波倉氏はもともと首里の酒造屋で大正の末期沖永良部に来た。店は現在の竹之下土産店から森土産店まで使っている。現在の重信商店・東洋タクシーの敷地に大山旅館があったが、やめたのでそこまで借りて商売をしていた。

(4) 永山盛吉氏 盛吉氏の父である盛源氏は、ヤンバル船をチャーターして沖縄から薪などを運んで来て商売をしていたが、沖永良部は良い所だということで昭和七年家族をよんだ。子の盛吉氏は現在の鹿銀の真向かいに工場を兼ねた店を開き、和泊で始めてパン・コンニャクの製造を始めた。当時の姓は慶佐次であった。父の盛源氏は農作業も得意で現在のいこいの家辺りで、当時としては珍しいスイカを作ったりしていた。

五 沖永良部出身の商人

(1) 前田喜恕氏 島の出身で、商売を営んだ最初の人である。明治二十四年生まれで若いころ迫十次郎氏の番頭を

し、また桜島あたりで行商をしたりして、大正四年ごろ前田商店を創業した。なんでも屋で繁盛し黒糖六千丁も取り扱い、農協の八千丁に次いで多かった。番頭は常時四、五人はいて、現在の鹿銀の敷地で商売を始めいまの場所に移ったのは昭和十六年ごろであった。

(2) 大坪政熊氏 尾辻商店の番頭をつとめた後、現在の手々知名の場所でも独立した。黒砂糖も五千丁ぐらい扱い和泊商店街ではへー（南）のキノ屋、ニシ（北）の政熊屋と並び称されていた。

(3) 市来政興氏 商工会の前身である通り会・共進組合・生活必需品組合・商業組合の会長をつとめ指導者であった。市来氏は現在の信用金庫の敷地にあった鹿児島三島という店の番頭をしていたが、主人が引き揚げたのでそのまま商売を続けた。また町会議員や議長もつとめ、永年の功績により勲五等を授与された。

